

70

65

60

55

50

周易存疑集 上

~4
4349
1



まうお底あ集乃、



中風ああよ風かくは体うの歌わ
きあむにいそひやはみれ
おや神よせうかうまつれ集田れ
おみちあうみのみよもよもつま
れいゆうとましるよをうく

る人ひとさへよな事ことなれどもあ
みましみましる所ところゆきとよみお
うれつうれつてはと枝えだかくはながせよ
あたうあたうりともととてかく一いち
となとなきりすまのあくまくわゆ
あくまくあくまくうじみまくわゆ
たまひたまひいよおもひうくわゆ

こころこころのまきはねひつくれく
さくせやとひくめのよみやのえあ
れとくへくくくへくはきりりとな
ざとななむちのめおひひくまく
おうおうくまくくくまくはの
ふ心ふ心たまうのよよりかおぎよ
とくとくくまくくくまくふ

わの弓手やよしのたとえ大白
の鶴がよしとく

岡屋歌集序

縣居り大人も江戸ふ物一絶せりなし。まか川
國へ遠江の國まで。代へ。あらわむの是ゆる重
ふひつにまかどち加茂大神。つづきありむ宮
人おわんあつさ。また人にあはるを
みはさはわうかよ。今とうおぬり栗田のあな
む。も内くわちら。球的の郡乃平尾の里所廣
瀬のハ幡大神お神をやして。まのそとより
まかく。おれの方事をとめひかへふすの歌を

も。まきやうになじむはふるい。ひや
ふさはまわたりかんあく。ゆめ
べのぶおまきますて。せせらぐく。く
わくらとく。みくくく。古わく。月
てよしわく。れよしわく。あよしわく。
おみくすく。れよしわく。かくすく
さほすく。りもあく。かくすく。
う乃くおぼきとえど。梓う春おぼき。
みくすく。か

て。天地と嘗ておさうえゆるう御代を行ひ。御
令國をもよほの海をか立いて。奥へすまむ約
取り巣とりてや。時未だ早苗かるを見て
は。天かずや林田長田よめと嫁げ。伊代と夫
めし。お管束いなき細江。林家ふくよち
わ。こうわい。よむれ即民。妹やがわ。早稻田
がアヨキ。おぬえほ。ハモは久里ありあれ
けひとみぬ。思し。猪柄あわやね。アア。大
アナタアマム。さやお中山山角まで。行は

の山ふすつむをと見ゆ。佐夜井なる山
目あいすやうおつえつも。阿波の山河はと等
のこうとよみ。或て濱名井岡本の里は築屋ふた。
三河井國のありのゑく神御衣あらと。伊勢
乃大宮ふすとすみまことわへ奉るよと
あへ。行とすうはとすもつすにまし
友めらひと。せふぞくわづかとうめい。或
そせナハナとすひゆ人れはれとこそほ。
みやじ雄かくとくの金のくみきふ。鉢枝う枝

物がけぬゆく末をねうひと。みわいあひ
古言ふんをとせく。まみつてらむくうろさ
が。みすくいきくおなゆま。ア。
千代と狂いや。一わふ古言の此字みずれ
もみ代おもむせ。言審おちはじまを井國
某は。今けくほまくよみよ。十代小路又
ばくはをねんせ。かくよふと中居太平。

印
號
卷
~4
4349



足利風教手本上の巻

從五位下藤原朝臣工滿詠

はるの破ノ葉乃う

梓乃はるさに久秋志。そぞろはあひかみをす。比き。久
めちか。ま不え以。よ。せは小。わく。すきり。すと。代
志。か久。そさうえ。あ。おむち。が。す。

えう

あううぬのもえい。伊。あ。一。神代。も。いく。じ。手。の。る。ら。う。せ

争。ち。ほ。ち。う。山。う。そ。き。も。あ。う。り。り。き。う。手。よ。か。け。ー。毋
わ。ひ。ひ。う。れ。ー。と。て。そ。ぬ。き。の。う。ち。木。花。ナ。リ。い。ち。う。ー。毋

金龍
先光清風氏
大正三年九月
先光華氏
寄贈
書

梅子

おまめやくひでけむ梅の花香るいろは春をえどる
春の水らいふと

ほじゆのそすみうち水辛ちうすに香すありやのみとく
あすくふゑこちりむとむつまの船り

梅の花年とて

けりはあめいろをほやむかとすすむ花のひもあくまくと
初春地をやりふらば

入行川山の冰うちじてゆきの山をもれまよ江
之月ハクイ不二の山とてゆく

ゑまくはくね。甲斐乃まくね。かすくまくまくね。

さく雪が布引てかたけり。さくよづき。さく波う山すや
の山かくらぬをふじま。とくせ山す。ふかくあ難て。えりよ。
さくくぬくすま。布エ乃山年。すき付くじくじく年。

えう

あまめやくひでけむ梅の花香るいろは春をえどる
む月ハクイ不二の山年とくね

アリハよみてつかは け

ゆゑぬ山年

竹子の春を算ねるまくとくね。山すはくすふ萬松

初春寫

春はまだ少しもたて未だかく一あそび酒をさうほ

あはぢ侍あぢ玉子、七瀬も度てお乃うら修ふもやうむ
二月半乃日布さう山宇へてよそへまう
日丸もまく不二乃き林に夜ふかすやそかは因モ季やうひ
竿まく行く花火あくまで知りふゆまはれある
布士丸林をすりすけりうよくまくまくまく
「さと

若菜

あれれ、先も見えずとも山里にわづなつみてし
あは、山あひ處傳ふるむけといまよし葉猿猿らうす
山里ゆきまわらわうよもえみてはり、小野の色とぞくら

名所ノニテ之ノ如

みゑみの門の年を老むむ
はねふねう花さきみところみ

子
四

御成ノ御子の末裔の代々、大富人の傳承である
海上文庫抄

朝霞

ゆみていまくらすくらほじまの山木本ねむるよし

春
悔

足利を過かは候相成もあらずや在内宣傳と申す

雪が

そくふを答へるまちつれて里子處へうなびての都
けさと花を咲かせらるる事あるまいと仰りて思ひて
色と香とあこぐれ事のむにあうとはすの声をよげま
社ふきりんの所當あまきけるをすて

英至うれり佛の枝ア折りテ之をさへく香代ヤリ

雪中雪

花を咲かせ花を落すとも雪だまふ何んともあま

雨中雪

春の花を咲かす事なく咲かぬは何ん何あつも雪の

冬夢やりよしと

咲花ふ不思う生守もしりりとの枝宇やとくやす
はれゆのなすす事日とあくまやくいふ門へおまめ移

すみれと

未ふさうれすもと志未門ゆき此地ゆにすみれ

雪と

ちやうじや花をもとまよまよめみどりの雪と

春うう

雪やうすまうすたまめ代のをちの山信ふ焉まよせく
梅づ花そむきとそもかとくも雪わねかつき月がおうて
春乃歌うあ葉づまとす里ふうちうむる袖ふきえう

我や汝乃柄花ちまくあへばきの山桜もすゑ走り年うも

残雪

まよふを下そむく春の雪にまよひぬすひとす

梅

うづくらあひあまけか柄うせまくはうかくせう防そく
めう花はうくまくいふくねをだりすけきのしませゆ?
梅う乃ほつよかなうけりまくわふんをかきくまゆうて
うとうとゆくう風うそうねをいみの初すゑの整つけ
柄うあうくせまくはうくとてよくとてよくとてよくとて
桺はやすゑふの柄うせまくはうかえさうておへとせよ
中う居

桺花すまかとまうじぬまくうく門馬かくふかおうまや

桺

あせ御あゆくやまくがふせ牛のまきまくゆくふせ風霞
山田川かはるい御うちねじ市新ま水もかせて下すりと
弓中御といふこす

矢多川かす御あかくまの弓くやせのふくよがん

垣ノ御

春うせふまくをかくも津うみに垣ノ御うちまくとせむ

春うと

ちうまくまく花字見るれいとうつうをふくよむ
桺ゆみ方ひ生ひておさあいのうておすいのふくよむ

歸雁

天の原宿に空をもとめくわくうくあくや乃れゆくみむ
歸雁此ぞアリ

壁ノ厚地は冬もかきげく季のぬうどこみまの行ひ

二月ハア河は山あれにてよる
志立ツカイあはれ乃山をち砂やえの神の毛山野りの
す山メリヒビ山あらういにそく山ふ乃送ふみ
都アリ神様らゆく方角わからりぬまほのせ
久美て久木本寺いまつたがすりせむらくふ
スと次代名あう取席ヤ村お山母お前傳くも
猿毛きひだふくすりの海の原毛し、かすまてひ

門ノ玄室、室乃壁也人手を手するや美代傳半手ア見
はれ、客のう兵、雪の如く、竹の山をみ花のあはれ、手足、ち
はちにおれにわみをさやれ山をやあと見え、手の加久
破弓乃かすがの加久さ布傳」や

あはれ山中、山の中央の中山乃西北の山にあつて
等もさき山をすが御、堂け、阿波の嶽の祝もとよ
・そよちひまき社あり今はすみ名あら傳と云
いふ一言の阿波の神社もじゆよす

待花

あはれ山の山乃不す傷にあつて候ア川附はすすぬ

さくらの平文

さくら乃是れゆくが傳あらそれわうふの爲めあて
獨花はれづきかをちゑひ傳ぎやまとすとぞよたま
あくひきれま山ともおみる雲の風ふ夷とあれあざり
すれれば秋つが草にあくれてくふり花うな小ねにり
ゆく秋はる山は國おみつえりほまえゆく花はれをふ

二序はうわまうけのて

名所花をよとせ

かく風ふちよおはてをえ山花をあか山の花をやいぬ
水色の花字

さきにか青く花のうけぬまに地のうこみをもつ
旅花

を風すてぐすやせ花はれす里人にはおうじさ

無事の花すつと

もみをうづひおけとあせかのうふきをと人あまつ
而甲子花と

ひあら花をもとせしをとえておとあてと角をす

さくらはま山はま山とも人のまくらうと

かくは山はま山はま山ともいふと風ふ夷とおはすあは

花下送りをよとと

さくらの花とてと本丸をよ後も日をとむれぬ方

花下言志

辛ノ葉やあうふひの木はすゝスアキモチマツノ

居所花

おとすゆをあそびが山ふあくうるふとややの花やうみむ

遠村花

我里花をとどすきはらひそひくみり物家あくよ

花留客

かづくひをかづくひ袖にけり花のんとくじるも

花滿山

咲きまくらあきまくらでさくす花あひてやさあくねくむ

霞中花

心もと音もあにええや咲きのんあくふみゆくにめり

隣家花

あやせす人あらゆひ花がてかほまちうとううとくはひ

雨後花

あれもひにひこい枝と風ひて吹き散ら花れまくら

惜花

いとくれだらうとくへかわせりといひ年をあはせひめし

白衣花

はなすとあらゆく花がれひははのねふあえひとよざま
せがゆとひまよ花をゆにあゆぬくいぬすことをあすす
くとくにかすきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

薦花

お詫びうとうとお詫びうとうと
心事あらへ来てくわ我ちれかいのふますとあゆぬ
夜思薦花ゆふと

故はさんをあらわぬ笑み我よまわせひまつ
出いきお花のまほあてちうひお花をむすめ
社役務をまつゆと

ちはやおみ神みやおたむえ縄トこえてちりむといふも
三官波のあさひよところせ以千えか柳
川底時をれあらむ駒形いはせ第とがくと
るそおみかまき乃どご方に奥川村神社と駒形明

神宇おひづ

掛馬久母あやあうへはまぞうひ原リ我らおもやに志
一和被肩まき天井せんふすき原波のうかわ作ま傳
さまでる岩うね以テのを成アモ原波のうけんく
をくわてゆ乃被天以ヤ駒みあらむむしに被てうだ
ゑ野原久山被波をあまくすくき鳴り被ていやふが
トアあくち葉れ山ふもあくち階れ久もあふもくを
ゆく半く、ゆく半くはく神れ神ふあまく波波乎おは
五ひあくあく神おきり以波うれく被てかく伊

名所春をゆとと

共ふまひよおはうちのゑまよまようけて庶見りすれ

これあ川ゑのねくすとすと

比はるわを

ぞりみとよてきあゆほいりあやまうせほのそつ彦や
すまむわつたちせのまく彦考ていてまくのとふくらひ

稚子

山安門のあはれの字うのさぬいをすと妻のひめとくす
辛口はすとおもへとすととくの彦の彦のとくすと妻や、
彦うすとおもへととくまゆくとあはれ。即はくすとくし

春助

すとくとまゆふとせはるかのとあはれとくし

苗代

蛭ゑと苗代を田アヤ榮さ一せすとひよひて種あきともあ
すとちとちと苗代か田あきにとくはやかくまうの神あう
備中國人吉岐武雄、父のち十カ多もく付屏風の
かこじととて苗代か水あくまう

いとちととて苗代か田あくにひん細谷川のみえとくすと

蛭

蛭ちとくとく一せすとタクヒテシムとくとくかはつ、とく

芦も

ははとくとく不す落かあくとくとくとくかはつ、とく

春歌

ゆくまのあきかとまよき山かの花かあはれあくとく

山次

大河川のあやみをよまや万葉まの花すきふう

藤

春えにうる葉まみづるよ花のいれ新羅くすすむ
枯山亭ま山すすてゆくもの程にてはるちるの花
やどしまくわ原のうぐとすみて
ちよキツテうらふとさをあひ花もとせうふあやま
ねすすがくもと
チモセトモヤキぬ新井放とすとスルアドヒタク
たちにあらまとお方なまほんもとすとすとすと
おうかこぬとのに

居移り川のあれまのまはくふやけふのむかしを
今まてあこがるはるえれいしつちむきてか葉の伊豆年
やどしまくわてせり延香うきとすとくくを
しむけとむけとむけとむけとむけとむけとむけ

月

庭ふるまきはのねりんせゆくもとす布とすとす

首夏

ほくまくのうれむとすとすとすとすとすとすとす

夕花

久遠のうれむとすとすとすとすとすとすとすとす

新樹と

あはれの山乃處のあまうとく林あすた色せこゑる

残花を

留まてあわ一花も吹きはすの風アリきらめき

かきあはめ

極厚の吹きうけの花とあきたヒナハラハナ

落葉花子て

さちの匂い香の空にほおほくえをはとほるあらは

様

あはれの秋ゆかすかあもんがみゆうあまくかすら

ほふと

折ちうえやなほよりかみのあやとつまちのひうり

さくすを

天祐葉やさすすをよしに神をくはくめきあか

みやうろのあよれ葉くわや小紫さくみ

心はひておも葉はすねておまきおあへあくはま

の山おうふくわさくくはておきりはくはく

うち葉をときうけて男のとすやく、とくへ

おもすきよむくはまくはくとくかきす

くまくはくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

夏乃燒行小

友のねうま。ひやあくすいふと。あなたもあらかねばい。

霍公鳥

山家郭公とひよきを

時鳥聲逼耳以至成

社頭時鳥

はいぐらさうすけんとせうる云様の神社を走る
窮屈に郭へゆくよもと

冥路曉鳥

五月而半

打まくらへ雲あがえぬさくらんかみのてき御門をまづ
すあはる不二れすむと申要候とてえとほとすみ月のに
さうせんやをかきも行まつもとゆくよばのまきこら
か浦川浦の源流をゆきすおねたうめがさくらんかのほ

照射

考ノ段山は山多チ山名ミテササギアリす、あはれをみどり

夏代

山ちうぐがやう字代わあくわおつるやす山ゆの傳す
ハズミノ山ゆめとて壁よへふみれあくくもみよに
山やまちとうえゆ布傳てけよふる代に松布

信より志あふわ伊へる山れあけひ傳れあ小伊
トキニホア引風室ゆよもすそ我あはやあふ
文おとやとふゆを

布代ナヘミテ布代す一地名を序の文よすと書の
ちう

鴉川

ぬ鷺羽代やみ宇吉ぬきてあててさ一地名も、又はのほ
かく引代とはやへゆうとや川浦あれやつを放げて船ふとくす

弓印

雪丸うちもきえう冬かくわゆまゆすりい角ちをす
雪うぐれわよもええ神てえ舟れうくにまじ神のうこき

夏歎

うだやうだま乃井原ゆ 庵のおりうがほとも あらわす
はちにを

宇守えみの草薙池不思議は はちすれぎちうさくとめ
はがくすうこう池ふおひそ見てあこびすまもんちうま
常夏

かねみばとゆくろうとわせみへよれすうやまとあて
ゆこえにゆふすこいづくいはくひあわかきほすあむ
ひぐるー

辛口ほてらひくりゆがくのかくよみのとせとうのとに
ぬうみほすりきうふまよとのとせとまわいくぐくわ

牧道

遊波うるみゆのはつと加きひをと浦やあやふかやうく
りほやく浦やあやふかやうくとす里やうでく

賀茂翁

ち壁や支あわけいのちの神代とて暮れうとをすあらね
くじと

友我ねいえの戸はやくらぬうううううやおとうとんの年
に蟹

網川す難波ほりにかせられあく思ふうてとすすうう
みすすすうひすくふすきうりふとくふ
のすりとく

ううれんのまよ風はまきうすこあ木のこすま

夏野

友乃里の春日たまをあれまくらふ花のいと
晩夏蟬声せつづくと

ほれとおけすくぬあらみがわすらうやれぢうき
納涼

かずちひはげすし山がれあらねんがくすみきとす
寢起やくよとよと

かくねあぬよこほりてはるえみまことやはうき
山井

山井伝丸井丸あらゆまけはりそりくとえこと
育めつゝうりに

かくきむ川井のむすはりよかはやくよすてえひぬう

立秋

和の神すあらおかじる向このかきとそのくにれはりりも
あはれ山すにむすよるさやの山のまやうなれりうも
う事きのまやかよ林の内あくやもよし林はゆの風のすく
秋の物の歌子にまよひゆくつれてゆさせはるかとくよひ
かと月夜のゆくつよし花やくまよひて川傳す

すみけの時

わちきむかく君の都へとゆきえ年中を渡りり
川の傳丸ぬるむれり井もよさやまくすし久ともう林の初詣
いの序の秋はわる松木や竹弓乃御ノであるが事す

松葉の音をうるさくするほどのはあがめに星うちすゝみ
天井川年々わだかまふくてきえぬちまつぶあえども寧
秋風の吹ふ一日より天井川うちすのまづまづらる
月萩の入ぬる子供に野うすてあまの星食うちまつと思
お席のあまの秋うすてまづみづほほほほほほほほほ
尾羽附せ神のかはすと天井川によがはうい物うそまづらる
お兵隊の秋うすて天井川今うたむ一私心ひまづらる
八日付あーとに

春星秋かはせ波よみ落とれく心のよふもあらし年
葉のうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

すまうのわくらむちのんううあらか野と人代よるも
おこうへ暖のうろき

千燈塔神代かすねわくらむちの妻玉きうねてあらせ玉代
かすね一年思ふてあ言ひうふりぬまくさんまくさん
ふもと林せう吹きまちぬれの守海に拂ひアリじぬんけ方
舟身美をとやかまといひ起きかく度たまふみ玉をと
玉をとすとおとす半玉くだけあらきとけ
さもす係りとめりすもあひきかこの天てうらまくともい
てわくらむれの内の角のこえぬちまつてあまふうくありて
きえゆす里すとおほきくしぬあ布被をとみ
天井川のまきかんで出てゆく、妹、あうふそをかわす

三日月

えもんにまくはる月あらと思ひをて
海邊霧ゆつとせ

なみは入の河の岸すくはまく空さう

行路多

ひまくあやどりに傳き方とてやまとくにかりぬう

む

ねづかまくまよおもいまくはる月のたまくすらむ

火虫哉

夕暮よ宵うすよゆきをめあはれはめぞさく

露辛

秋の所不様や見ゆ法とわきえてせぬふれ不事

辛子

春夜のよゑひて林風すれ風すくはる月
三葉すほやく利得ふそよぐかくくはれ林のむとすくは

草花

朝戸出の夜キタヒヤヘア夜をはる草花とまくまく

辛みち草

ほりくや草木門(?)とくは月をうながすかげくはる

ササニ

秋はきふ被すかねはけりまうあ裏不すきぬとぬ
被松有信(?)をあらぬうみ草の花はくは

年老には秋れあづまくやまとてほきくふよ
てあくくとあるかとひるうみかわせをあさみてお
あととせん古事記をまかす事てほきくゆく
うじむかそしてよ。

笑ふばやどね者とればきのあら枝すこゑて花を落す
すまを

あくはまかか山みのあすすにすすむとくす秋の又花
タノ花をまかすとがむ花房師主がはあらまほくらす

秋野

秋の空の花のうすにゆふとほやひまくうりういすり
月前あやしよと

あ葉づれあゆくとすら山木を厚すとすまうら

秋山

山風も蕭条すとすまうれしあまくいえく
はつきりうれしあまくいえく

秋は山破山生すとすまうとゆくとすまうとゆくと

月乃あうアラカ

秋はかくと物語すとすまうの神ふあむ月乃あま

秋野

山風の音葉づれあむとすまうの神ふあむ月乃あま
美山はとすまうとすまうとすまうとすまうとすまう
あむとすまうとすまうとすまうとすまうとすまう

鹿

あともといたるまくや原の山が鹿の山
れそれも家を守り妻と山廬山ありてやうじよきこのむ
者多くは山はなとかばく構えゆくゆくのまづかくに
きをひき我ち身に波山のいはすにや有三方かくとせざる者

草葉

我らの落葉下木のあまきもあとすを秋のうへええりか
あああああああああああああああああああああああ
タヤシ代ハ辛シカ萬葉の秋のやう山のまちちはくと
水をとむ葉

山内山内乃まかちほづきとすゆのぬあらぐてえす

秋葉落葉とふことを

月

かかはる葉を色わかすと神奈月をすくすく何とまちむ

きもはる葉ふとせむとたの神代りすリーネもはる月を
海秋原ゆのやはあひか入けのうみあさうすといゆき山林
大至極ノ美とすいはくともうねと月乃あくとれうすに

かく

天乃海ふがものうひきゆはる風拂ふるきゆ
久秋のあまのいきまかまわてれつはまかくのまおう
さつ月がうす虫せとくとくあみあみひとくかく
さくいゆまくゆまくゆまくゆまくゆまくゆまくゆまく

左の事は必ず右の事によつてゐるからである
川とくのいふ事

山里ちつねふうすと、床のあはへひてあや、まうむと、
秋乃く

お、以後の山高木林の如きはいつてゐる刃のけふをもとめ
中年から富松のまことくが中村はすらすらと走る

此種秋末空氣
花木之葉已
落葉之時秋之
氣也

秋はきかまゆすて
山川のえれひどりも
ちやあらわ

月と云ふ事は、月の形をした金を意味する。月の字は、月の形をした金を意味する。

杜乃處すうすうと
此も隠の本の事あおきそ

おとこは死んでしまつたが、おとこの娘は生き残つた

わからぬ事はつまらぬ事

ゆう代の風氣をあらわす

名子孫名之

芦我の子の宿やすらまめあはれわまくふえり

海邊擣衣

い塵埃玉まちやう衣打すを声を聞くおきこゑる
丸月のうひ波とすくとて

宇須久はくとゆれにそええきよかうも秋の山

秋旅

度つてまくと待まの宿すとくと宿のえあくま

秋の難むづかと

乃たすとあいのあくふく船のうとて見るは
林我本すいふこと

柏木乃まき舟宿のうとすはくておれゆ枝舟をきく原

かくのうく月十の夜すとくは林のうと月工三村寺

角折く破れたり

前月母は幼年も月残るを喜ぶ林我本すいふやけり

秋節夕

音さうてくわく林のうとすとまめをかすとすとすと

林我本すいふとすと

黒葉がすとすと細のうとつとく林我本すいふとすと

秋夕

ほほんさうとおとおとおとおとおとおとおとおと
くおほんとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
つまうつき者もおとおとおとおとおとおとおとおと

考の事多しとて、かのつらひをもて、お久門をへり
行けり。序もつね馬とねまち道とをあ
へるかあくたがりをゆきをあはせすがえす考の事多し
お伊いえの母

時ノ母い川のあはせす利病の候を里にまきいじにまく

秋田と

字ちくは秋田が至ていつの候事のうあゆめはる

四

荷ほどひてととぬれとあ口つり候事のうあゆめはる

其れ中とよしと

林立とおもむの是れとやくとてはるを

幸の月訪にさうと被葉山アリテ、う風さに
天井門はあまくらる。是れあ
辛ちほちの母おちはちほちぬかちお義取、くにねりくまむ

初冬

小山見ましめし。是れおはせおきてそひ未わらに
きうけの月終ましめあ。かのまか風をそよぐ
旅宿晴れなりと

あれきじややふ本邦おはてんをまほ日とよくねま
あひ一地

只以はうとあへてこえをすて文り月孔かよ。

ちゆり

わの原おきいと風をもて有り月夜千尋波
吉野川うら波あまえとさきにかくちやちととなむ
つよかよるよがにねむはう浦の水もうかとす

芦のふる

水鳥の音ねりいはすをかきひの行ひあれふあを

氷

志賀がややみきひなういれゆくにきはまほほほ月の

水

そよよひのまのまくにたまへて碧の青葉の色をうへ
さをやけく岸井をあくとまめみすの風あらやまく

すくは月

かゝつてのわをあらぬかすりのうとすにこゑやうたのよ月

水上芭蕉

母娘ちほく本すゑかあせあはせとてうすく水の林とこそうそ

夜落葉あすづとと

嵐草さよひく跡」えみちほくあらわちくさまたやうさ

くせー霜

冬木叶向田乃水も葉はて、いさうあらくおとおきけ

移霜やつともと

竹の音やく葉の空鳴りと風くま代、おとおきくは

時霜

歌をさむおき出くれ。有ゆれおきしておまも

寒車と

中あかねはすくおのほりある雪下くや

山家を朝すうすと

人あちあかねみわくちほはる家つとおまをあきる

綱代

すらはちあ白浪さわくたはやえせ成うち川のそつやう木

えをとつまと

岩のあかみあけすくさくと。おけのまう山アキアヒ

桜太

夜半すむあひてそれから火の(ま)すまの色とあります

冬の天象をつまと

風はいきまほれかさくばゆくまほくとおへりまほ

岩窟

まほくかの御の岩窟住人。おれすす山ふるすとある
かであか和井す。かまくら。あまくら。せと。あまくら。あまくら
山窟。おれすす山窟。じゆ。じゆ。けおれすす山窟。じゆ。かわら。窟

宇喜多

新波の入乃あつかひ放て。おれすす山。おれすす山

初雪と

おれすす山。おれすす山。おれすす山。おれすす山

雪

老翁あつて望山をすすりたる所へ里あそびむちす
うれつとゆきうれしきける内

冬人れすとよとせう美田變る事かまうとゆきくわ
わうすよし山とはれて海ふれまこところうれしき
おもといとよせう

あぐり雪すつと

けなますゆきくわせゆきのいとゆきまゆきまゆ

海邊雪

多幸流ふき井かくははうきとひをさしたつとよ白雪

メ雪

冬人すやく山風すみてあはれうきあくわくとゆく霞

雪中地空

冬人すやく山風すみてあはれうきあくわくとゆく霞

川冬月

山川すゆすゆすゆすゆすゆすゆすゆすゆすゆ

物すすき

秋葉山林すゆすゆとわけゆふかほはまつてあはれうき
あはれ

鶴鳴すむらじ山風すゆくすくすくすくすくすく

き圍圓霞ゆくすく

夜ゆすづひあるの風すくすくすくすくすくすく

社頭之月

天終也未なる秋水も済厚む五十度のまた夕日もえど

早梅

う木の花を咲かれてはあがめ立ちて坐りてやふるまわ

年内立夏

あらわせとあ一年たるぬ春のあがめ小舟一叶をあよ
せばともにまくは咲き初の花ですやうめくろもひまきあ

が葉あありうながまではうふらむりのうみくわくわく

赤きを懷

おほな立く神代のさとすよ青いる月のいヌをくぐ
玉ははうかごぬれのりあさうひはく

夏すとうねるる布衣のあら年幼のときあらあくま
うとるがてかのうさかうたはるるくくくの間をかん

およすつこととのつり

け年、ことをはやくとがはくとくとくとくとくとくとくと
え来るる方をゆくふねよはのたまはすいつとほりと
年秋ゆくも

